## ❷ 先進地研修旅行「新城市設楽原ボランティアガイドの会との交流」（9月5日）

参加者79名は、2台のバスに分乗し、早朝出発。しかし、昨日からの集中豪雨で桑名、四日市の道路は、通行止めになった為、進路変更。車中では各ガイド会が活動、情報等を話し合いながら、名神高速で現地へは約2時間遅れの12時に到着。設楽原ガイドの方々も2時間待機して頂き、午前中の予定行動は出来なくなりました。

新城観光ホテルに到着後、車中で引いた座席のクジでグループに分かれて食事し、部屋を移動して交流会を行いました。発足4年目の設楽原ガイドの会、少人数ながら熱心さと活動力に感心。"一期一会のおもてなし"を目標にされ、毎年8月15日に信玄塚で催される[火おんどり]に先だって行われる竹広の盆踊りで唄い踊り継がれる「竹広火おんどり数え歌」が会員によって披露されました。又、津市の13団体によるネットワークの成り立ちや組み立て方法についての質問もあり、津観光ボランティアコーディネーター山本晃氏がホームページの作成・連絡方法・月1度の連絡会・ガイド養成・津ふるさと学検定で団結力アップした事・助成金等について応答されました。

其の後、約2.5kmもあったとされる馬防柵再現地を案内され、信長の鉄砲隊が火縄銃を戦術に用いた柵が二重、三重に構築された事や、設置された柵の前に果敢に挑戦するも敗北した武田軍騎馬隊の攻撃の様子等を描写した成瀬家版「長篠合戦屏風図絵」の解説も受けました。

長篠城跡に移動し、要所にガイドが配置された跡地を自由散策。隣接された長篠城址史跡保存館を見学。1575年、武田勝頼軍対織田信長・徳川家康連合軍の長篠城奪還戦は"鉄砲の戦い"といわれ、鉄砲、甲冑、槍、血染めの陣太鼓、磔に散った鳥居強右衛門の様子も展示され"天下を目指した若武者たちの夢の跡"を鑑賞し、戦国の流れを大きく変えた戦いを学ぶ事が出来ました。

（べっしょ・ふきこ）

# 『こかなし』小考

山本 浩子

2月の15日「士清の会」の勉強会があって、清泉女子大学で教えておられる小野春菜先生のお話を興味深く聞いた。語釈の漢字にある右側、左側のフリガナについて知った。私共にも理解できる言葉を選んで話され、久しぶりの知的好奇心を抱いた。
見出し語「こかなし」にある説明の中に「コカ」「トキハカキハ」「ツブテ」の振仮名があった。
「こかなし 雪梨をいふ、肥前高来郡の空閑の産をもて名とせる也といへり」とある。「実が丸く色が少し赤い」ナシであり、「空閑」（コカ）という所に産するから「こかなし」というとある。果物のナシ、津市の久居の辺りでは「ありのみ（有りの実）」と言っていたと思い出す。

その次にこれはプリントに省略されている部分だが、
「○世諺になしもつぶてもといふ事は婚嫁をいやしめて、つぶてをうちし事、梵書に出て、我邦の俗となり、後にはこかなしをもうつは嫉みて、子が無しの義を取たるより起れりといへり、胎婦に梨子を忌て食はしめざるをも亦同じ、されど、本は子をうむ事をなすといふによりて梨子をうち常磐堅磐をいはひて、飛礫をもうちたるなるべし、つぶての條考合すへし」（『栞』後編）
とあって、この部分に興味を持った。

「こかなし」という文字列は私の中では意味に結びつかない。語釈を読んで「空閑（こが）に産した梨」と理解する。
「なしもつぶても」は諺「なしのつぶて」を強調する言い方であり、「「梨」を「無し」にかけて、便りを出しても、先方からはさっぱり音沙汰のないこと」（『広辞苑』）の意味であり、現在もよく使う。「なしのつぶて」は嫁を卑しめて、小石で打擲することで「梵語の本」（仏教の本？）から伝わり、我国にもそういう風習があったが、後には同音の「子が無し」の意味に理解して使うようになったという。この部分、「世諺に…といへり」とあって文献からの引用であると思い、『世諺問答』をネットで調べてみたが、まだ探せずにいる。妊婦に梨を忌む、食べさせないのも「梨」が「無し」に通じるからである（忌詞）。けれども、本来は子供を産むことをなす（生す）の意味で、「梨を打ち、お祝いとして礫を打つ」というのであろうと、大体そういうことを書いている。
「なし」＞「無し」＞「梨」＞「生し」と語の音通をもって意味を理解してゆく江戸時代の国語学、『和訓栞』の語源解釈の面白さを知った。

帰宅して文庫本の『言海』「こかなし」を調べてみた。

こがなし（名）[肥前、高来郡、空閑（コカ）ノ産ナルヲ以テ名トスト云、或云、肥後、八代郡、古閑橋村ノ産ナリト、或云、熊澤了介、下総ノ古河ニ植エ開キシモノト]梨ノ一種、実ノ形、丸クシテ、皮ノ色ニ赤ミアルモノ。乳梨。

語源について肥前の「空閑」、肥後の「古閑橋村」、下総の「古河」と様々な説が引かれている。ともかくも、『言海』の作者が『和訓栞』を見ていたことがわかる。

（やまもと・ひろこ）